

難波宮遺構の考古発掘報告書の批判

豊中市 大下 隆司

はじめに

筆者は昨年の八王子セミナーで、古田先生が今後の研究方法として示された三つの指針「イ. 中国史書、ロ. 金石文、ハ. 考古出土物」を報告しました。この中の「ハ. 考古出土物」について、私たちは直接調べることが出来ないで、大学や市町村教育委員会が作成した発掘報告書に頼ることになります。この場合、“報告書作成の方針”や“出土品の考察”が学会の権威者、行政の思惑などに影響されていないかという問題に直面します。

大阪上町台地の難波宮遺構については、大阪市からたくさんの詳しい発掘報告書が出され、「古田史学の会」ではこの発掘報告書をもとに長年にわたり「難波宮遺構は九州王朝の副都であったか」についての論争が交わされてきました。この論争の過程で浮かび上がってきた考古学上の問題点を取り上げ報告します。

(一) 難波宮整地層は前期・後期に分けられるのか？

上町台地に二つの時代の難波宮遺構が出土しています。新しい遺構は聖武天皇の天平 16(744)年に遷都された後期難波宮であることが分かっていますが、古い遺構(前期難波宮)が天武紀 12(683)年の宮か、もしくは孝徳天皇の白雉 3(652)年に完成した難波長柄豊崎宮か、それとも日本書紀に記されていない宮の建物なのか、畿内の考古学者の間でいまだに論争が続いています。

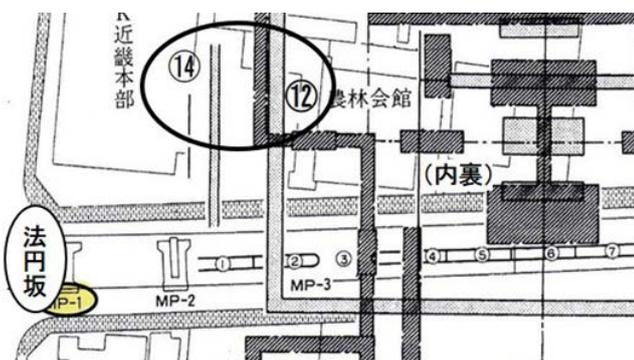


図1 難波宮遺構北部の平面図

図1は難波宮整地層からまとまった須恵器が出土した難波宮遺構の北側の平面図で、図2はその地下の地層の断面図です。

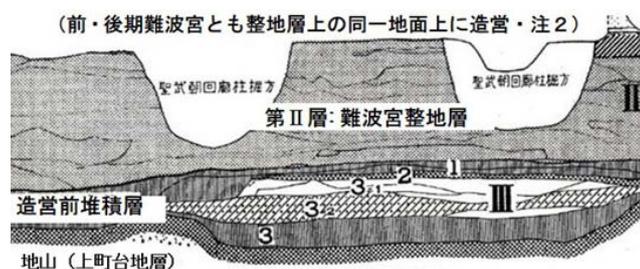


図2 難波宮地層図

難波宮発掘の初期の段階で行われた図1の楕円で囲まれた場所の地下から、七世紀後半に使われていたと

される“須恵器「坏B」”(図3)が出土しています。当時(1960年代)は大阪歴博内部(注1)でも前期難波宮が天武期か孝徳期か方針が決まっていなかったようで、このことは次の二つの報告書からこの「坏B」に対する見解に迷いがあったことが読み取れます。

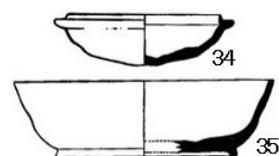


図3 整地層出土の「坏B」

1) 「坏B」出土地点の地層と実測図(注3)

難波宮報告書第四の実測図11には、整地層出土の土器として660年代以後に近畿地方から出土している高台（糸底）付の須恵器「坏B」が記載されています。そして

- ・難波宮整地層（図2の第Ⅱ層）は難波宮建設時の整地層である。
- ・整地層が二層に分かれるかという問題について今のところそれは見つかっていない、と記されています。

この場合、この整地層は660年以降に造成されたものとなり、652年完成の孝徳天皇の難波長柄豊崎宮説は成立しません。

2) 整地層から出土している「坏B」の大阪歴博の解釈の変化

ところが四年後に出版された報告書第五において、大阪歴博は；

a) 地層図の第Ⅱ層に孝徳難波宮整地層と聖武難波宮整地層がある、と思われる。

b) 出土した「坏B」は聖武朝難波宮造営時の再整地層と思われる部分から出土した。

と、整地層が二つ存在しており「坏B」は聖武朝難波宮造営時に埋められたもの；

との解釈をしています。この解釈の根拠について、大阪歴博学芸員の松尾信裕氏から次のような説明がなされています（注4）。

- ① 整地層からは様々な時代の土器が出土するために、整地層造営時の編年が出土土器からは困難なケースが多い。
- ② 難波宮整地層の上には前期難波宮と後期難波宮が造営されており、その遺構や遺物が重層的に出土する。そのため、前・後どちらの造営時か不明な場合は、「難波宮整地層」という表現に留めるのが学問的に正確である。
- ③ その「整地層」出土遺物の編年は個別の出土状況や共伴遺物から前期難波宮時代のものか後期難波宮時代のものかを判断しなければならない。

同じ地層の中に時代の違う土器がある場合、その地層の年代は一番新しい時代の土器を基準に設定すべきで、推測をもとに地層を分割してはいけなないと考えます（大下）。

（二）京都市・大阪府の考古学者からの“大阪歴博の年代観”への疑問

1) 小森俊寛氏の前期難波宮遺構の天武期成立説（京都市埋文研）

7～19世紀の宮都から出土する土器の編年を系統的にまとめ上げた小森俊寛氏は、『京から出土する土器の編年的研究』（注5）で次のように述べています；

① 難波宮整地層から7世紀前半のものとされている「坏H」と7世紀後葉以後に位置付けられている「坏B」が混在して出土している。

② 考古学的方法で、これらの土器類が出土している整地層の年代を特定するなら、量の多い少ないはあっても、土器群の年代の下限を示す新層側の年代観を採用することが原則である。：

さらに大阪歴博報告書の図版に“整地層出土”と表記されている土器を調査し、それらの土器群の中に、大阪歴博が難波宮周辺谷の調査から七世紀後半と位置付けている須恵器と、同じ形式の土器が含まれていることから、“前期難波宮遺構は日本書紀と結び付けるなら天武朝の難波宮に比定されるべきであろう”とされています。

2) 大阪府立「近つ飛鳥博物館」館長白石太一郎氏の“難波宮遺構＝孝徳期否定説”

日本最大の須恵器生産地「陶邑」の土器編年と、飛鳥の遺跡から出土した土器を比較し、七世紀土器の暦年代を研究している、大阪府「近つ飛鳥博物館」からも、大阪歴博による「難波宮整地層出土土器の年代観」に問題があるとして“前期難波宮遺構の孝徳朝成立説”に疑問が投げかけられています（注6）。

図4は大阪歴博が認定した整地層から出土した須恵器の図と出土層位模式図です（注7）。

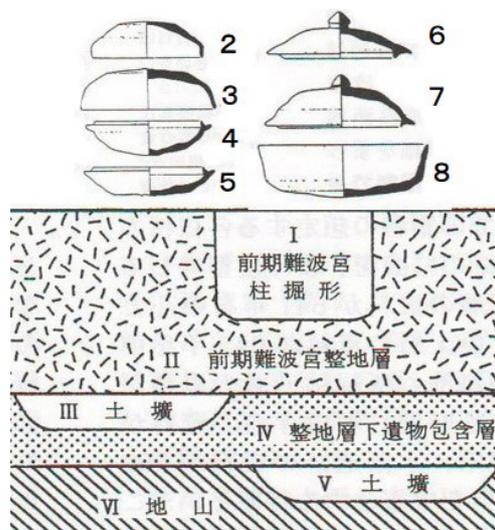


図4 前期難波宮整地層出土の須恵器

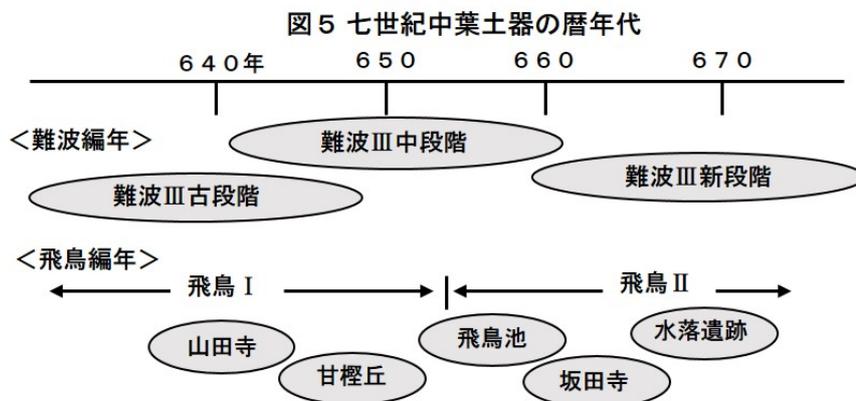
大阪歴博はこれらの土器群を七世紀中頃のものと

とし、これを根拠に前期難波宮遺構の孝徳朝成立説の根拠にしています。大阪歴博の説明は；

- ① 図4の土器は難波Ⅲ中段階で暦年代は七世紀中頃（640～660年）である。
- ② 孝徳紀の長柄豊崎宮造営は652年。この時代に図4の土器が使われていた。
- ③ 前期難波宮整地層は難波長柄豊崎宮造営時に作られたものである。：としています。

これに対して“近つ飛鳥博物館”は「館報16」において、近年の研究から、七世紀土器の暦年代は10年単位で把握できるようになった。難波宮整地層の造成には各地から大量の土砂が運ばれてきており、そこでは数十年単位の年代把握作業しか出来ない。大阪歴博作成の図4の整地層出土土器の中には明らかに、660年代のものと考えられる土器が含まれている。従って整地層上部に建てられた宮殿は“孝徳天皇の難波長柄豊崎宮ではあり得ない”とされています。

<難波編年と飛鳥編年の違い>



大阪歴博の「前期難波宮遺構＝孝徳の宮都」説は揺らぎはじめています(注8)

(三)「九州王朝副都説」の唯一の根拠となっている「筑紫土器」について

最新の多元153号に、古田先生が“「副都説」を成り立たせるには、上町台地における考古学的証拠が必要”と指摘された宿題が“上町台地出土の「筑紫土器」によってクリアされた”との報告が掲載されています(注9)。

この土器を発掘した大阪歴史学芸員の報告書には次の数字が記されています。

そして、韓半島と筑紫から搬入された6～7世紀にかけての土器の分布図(図6)が掲載されています(注10)。筑紫土器は難波宮南方の谷“U”地点から出土した7個の破片のみです。この土器でもって「九州王朝中枢領域の人々が前期難波宮の建築に関係したことになる(注9)」とどうして言うことができるのでしょうか。九州王朝説と結び付けるにしても、飛躍がすぎます。

わたしたちは、出土した土器を九州王朝説の視点から見のではなく、出土した土器全体の分布、並びに土器以外の出土物も考慮して、総合的にその遺構がどのような性格のものか、考察を進めていく必要があります。

七世紀前半の上町台地から、これら韓半島土器の出土する地点を中心に“鑄造・鍛冶、ガラス製品、漆製品、糸紡ぎ・染色”などの小規模な遺構が出土しています(注11)。当時の上町台地には任那喪失により韓半島から引揚げてきた倭人たちによる手工業を中心とした古代都市のようなものが形成されていたのではないのでしょうか。

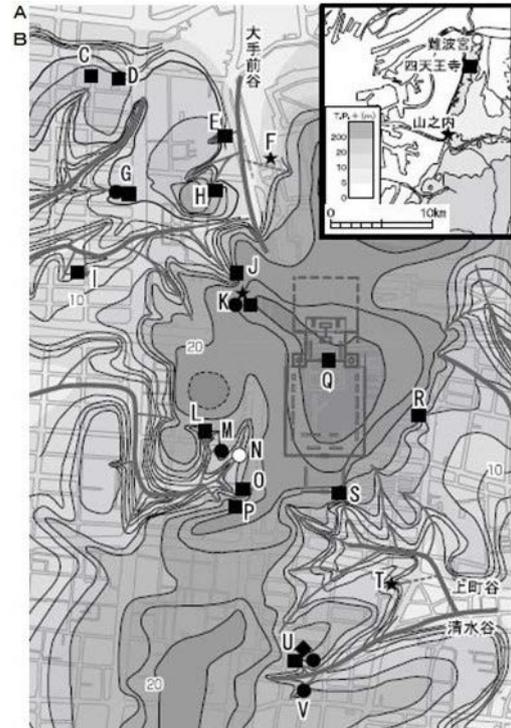


図6 韓半島・筑紫土器の出土地

7世紀中頃までの上町台地には副都が存在したという考古学的証拠はありません。

おわりに

平安京を発掘した小森俊寛氏は、前掲著書において次のように述べられています。
「現在の考古学会が実施している七世紀須恵器の実年代認定作業は『日本書紀』の記事を基準に行われている。ところが『書紀』の記述が正しいかどうか、現在の時点では誰も証明できていない。このような安易な方法ではなくて、まず正しい編年を構築し、そしてそれを徹底的に突き詰めて実年代を算出すべきである。本当の考古学の方法論とはあくまでも考古学の立場を貫いて、まず考古学の立場から実年代を算出し、その結果を文献と照合する方法をとるべきである」

私たちがまた「発掘報告書」そのものの性格を念頭におき、その解釈・説明を鵜呑みにす

ることなく、出土物そのものを自分たちで解釈できるようにならなければならないと思っています。そして「九州王朝」ありきという立場から考古出土物を都合よく解釈することは絶対に避けなければなりません。

**従来と同一の手法に依拠しつつ、それを「九州王朝」に“接ぎ木”する手法をとってはならない
(古田武彦「東京古田会ニュース 150号」、「多元の会会報 115号」)**

<注記>

- 注 1:本稿では大阪市立歴史博物館、大阪市文化財協会を「大阪歴博」と略称します。
- 注 2:『難波宮址の研究』第十三、第四章遺構の検討、大阪市文化財協会、2005年
- 注 3:『難波宮址の研究』予察報告第四、1961年、第五、1965年、難波宮址顕彰会他
- 注 4:古賀達也「前期難波宮天武朝造営説の虚構」古田史学会報 151号、2019年4月
- 注 5:小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房、2005年
- 注 6:白石太一郎「前期難波宮整地層の土器の暦年代をめぐって」『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報 16』2012年
- 注 7:中尾芳治「難波宮発掘」『古代を考える難波』直木孝次郎編、吉川弘文館、1992年
- 注 8:佐藤隆「難波地域の土器編年からみた難波宮の造営年代」『難波宮と都城制』中尾芳治、栄原永遠男編、吉川弘文館、2014年。佐藤隆「難波と飛鳥、ふたつの都は土器からどう見えるか」大阪歴史博物館 研究紀要第15号、2017年
- 注 9:古賀達也「難波から出土した筑紫の土器」多元会報 153号、2019年9月
- 注 10:寺井誠「難波に運ばれた伽耶・新羅・百済土器」『東アジアにおける難波宮と古代難波に関する総合的研究』研究代表者 積山洋、大阪市文化財協会、2010年
- 注 11:特別企画展「都市大阪の起源をさぐる」大阪歴博、2016年。シンポジウム「難波宮下層遺跡と上町台地北端部の開発」大阪歴史学会、2017年

<図の出典>

- 図 1:『難波宮址の研究』第七・報告編、大阪市文化財協会、1981年
- 図 2:『難波宮址の研究』予察報告第四、難波宮址顕彰会、難波宮址研究会、1961年
- 図 3: 同上、実測図 11 第Ⅱ層(整地層)出土の土器
- 図 5:佐藤隆「土器の編年研究からみた前期難波宮の暦年代」『東アジアにおける難波宮と古代難波の国際的性格に関する総合研究』大阪市文化財協会、2010年。白石太一郎「前期難波宮整地層の土器の暦年代をめぐって」『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報 16』2012年より作成。